

## 式 辞

桜花爛漫の春四月、本日ここに、畿央大学健康科学部ならびに教育学部への入学を許可された皆様に、心からお祝いを申し上げます。

畿央大学は、ここに学ぶ学生の一人一人が将来のありたい姿、夢の実現に向けて、大きく成長できる、素晴らしい教育の場です。この教育の場は、畿央大学の構成員である、学生、教職員、そして既に社会で活躍されている卒業生が一体となって作り上げてきたものです。

今日からは新入生である皆様もその中に加わり、一人一人が人生の夢の実現に向かって大きく成長されると共に、畿央大学もさらに発展することを期待しています。

畿央大学では、冬木学園の創設者である冬木智子名誉理事長・学園長が52年前に言葉にまとめた建学の精神を、教育の理想としています。

本学園の建学の精神、それは「徳をのばす」ということを、まず、第一に挙げています。徳とは、人の寂しき、悲しきを察する心をもって、優しさを世界中に広めていこうという心のありようです。今日、入学された皆様は、各自が持つておられる「徳」をのばすことをもって、心に秘めたやさしさを世界中に広め、人に幸せを与えられる人になっていただきたいと思ひます。

次は「知をみがく」という言葉です。これは、人間の進歩向上は、自己の才能を最大限練磨することであり、私達はあくことなく頭脳を磨き、励まし合い、研究的な態度を養おうという、あくなき知的探求の「学びの姿勢」を示す言葉です。ここにおられる皆様が、「なぜか」という疑問を持ち続け、分かるまで探求を続けるということを実践していただき、専門知識を深く、広く学んでいただきたいと願う次第です。

そして「美をつくる」という言葉です。美とは私どもが何かを作ろうとしている活動のゴールにあるものへの最高の評価ではないか、憧れの対象となるものではないか、と思ひます。芸術作品はもとより、工業製品から、魅力ある心、姿、音、絵画そして言葉、さらには数学の定理や自然科学の法則、それら具象的なものから抽象的なものまで、そのありようが、すべては美に結びつきます。美は人に感動を与えます。そのような美を創り出せることは大きな喜びであります。「美」をつくることに加わり、美への憧れを秘めた一人になっていただきたいと思ひます。

新入生の皆様は、「徳をのばす」「知をみがく」「美をつくる」の言葉に示された建学の精神をこころに深く刻み、これからの大学生活において、健康科学、教育の分野における専門的知識と確かな技術を学んでください。

ここまでは建学の精神についてお話ししました。ここからは、大学での学びについてお話しします。

大学での学びで最も重要なことは、自ら積極的、能動的に学ぶ姿勢です。畿央大学は、学生同士が切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら成長できる場です。このなかで、学生の皆様が、将来のあり方・生き方について高い志をもち、そのありたい姿の実現に向かって学び続けることが重要です。学び続けることの原動力は、「分かること」の楽しさを経験することであると考えます。なぜかと問う知的好奇心を大切に、分かるまで考え続けることができれば、分かることの楽しさを経験できます。

さらにグループ学習や現場での実習、地域連携の取組み、国際交流などにも積極的に参加してください。学生の仲間や先生、職員とのつながりを深めるとともに、学外の人と交流する中でも多くのことを学んでください。感動や喜びの経験は卒業後に職場で、そして社会に貢献する大きな力となります。

畿央大学におけるこのような学びをとおり、学生の皆様が人生の夢の実現に向かって人間として大きく成長されることを期待いたします。

皆様の成長は、各自の絶えざる努力・研鑽からもたらされるものであるとともに、仲間である学生と教員、職員の一体的な協力、さらに教育研究面での社会への貢献など、畿央大学総体としての活動の中で達成されるものです。

畿央大学は、皆様の参加を得て、教育研究活動をさらに充実発展させ、教育研究の質と、社会への貢献において、日本の中で高く評価される大学の一つになることを、学生、教職員とともに目指したいと思っております。

今日この入学式を映像を通してご覧いただき保護者の皆様方におかれましては、本日、ご子息・ご息女の晴れの姿をご覧になる喜びは如何ばかりかと存じます。ご子息・ご息女が大学生活の中で自立していかれる様子を温かく見守って頂き、また畿央大学に対してもご支援、ご協力をいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、たいへんご多忙の中をご出席いただきありがとうございます、広陵町長様をはじめ、ご来賓の皆様方に厚く御礼申し上げます。今後ともどうぞよろしくご支援のほどお願い申し上げます。

以上をもちまして本日の式辞とさせていただきます。

平成二十八年四月四日

畿央大学 学長 冬木正彦